

日本語教育実践研究 (7)

—漢字教育実践研究—

鈴木 義 昭

漢字教育実践研究は、今期で十回目を数えます。この授業では、漢字教育の在り方を考え、それを実践の中で確認していく科目として存在してきました。漢字系学生と非漢字系学生の問題、漢字教育と語彙教育の問題等等、古くて新しい問題が受講生の脳裏に映像を結ばせてきました。

具体的には、この授業は、日本語研究教育センターに設置された授業、「漢字指導7・8」(鈴木担当 月・5限)に学生とともに出席し、担当教師の授業を見学する傍ら、教育実習を行い、授業に伴って生じる諸事務(出席点呼・小テスト採点・成績記入実務等)の経験・習熟を目指す科目であり続けてきたわけです。

2005年度秋学期には、以下の五人が本時を選択し、それぞれ教壇実習を二回ずつ行いました(氏名・題名)。

夏 俊 ; 「漢字の仕組み」・「熟字訓」

魏之濤 ; 「漢語の構造」・「漢字一字の読み方」

柴野たまの ; 「音訓の読み分け」・「——」

朱金月 ; 「同音異義語」・「同訓異義語」

費 騰 ; 「熟語の読み方」・「——」

なお、本学期末に課せられた共同研究としては、「難読語の指導」—常用漢字音訓表付表より—と題して、「漢字」・「難読語」・「熟字訓」・「あて字」について、レポートを作成しました(以下、本稿に掲載)。これは、自身も外国学生である、受講生の問題意識の一環としてご理解いただければ幸いです。

(スズキ ヨシアキ・日本語教育研究科教授)